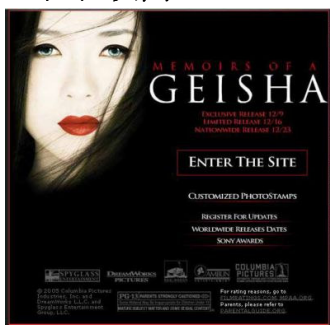


## ワシントン情報、裏 Version

2005年12月21日

竹中 正治

### 「ゲイシャとサムライ:映画“Memoirs of a Geisha”」



アメリカ版公式サイトから

#### 【日本ではSayuri、アメリカではGeisha】

“Memoirs of a Geisha”はアメリカ放映でのタイトルであり、日本では“Sayuri”のタイトルで12月に日米ほぼ同時封切りとなった。1930年前後の日本、貧しい漁村の極貧農家がこのまま一家全滅するくらいなら、身を売ってでもせめて生き延びて欲しいと、二人の姉妹を女衞に売る。「みやこ」(京都の想定)に連れてこられた姉妹は、別々の置屋(おきや)に売られる。年下(9歳)のチヨは置屋の下働きとしてこき使われ、年長の芸者のいじめに遭いながらも成長し、やがて舞妓(修行中の芸者)となり、サユリの名前で花柳界に芸者デビューし、花形芸者の道を歩き始めるが……、という芸者サユリの半生の物語である。

映画の会話もナレーションも全て英語である。サユリを演じるのが既に国際的に名の売れた中国人女優チャン・ツイイー(Zhang Ziyi)、サユリが思いを寄せる「会長」と呼ばれる大阪の企業家を渡辺謙が演じる。その他、サユリの働く置屋の女将が桃井かおり、サユリを一流の芸者に導く別の女将が中国系マレーシア人の女優ミッシェル・ヨー(Michael Yeoh)、サユリと同じ舞妓仲間に工藤夕貴、彼女をいじめる年上の芸者が中国人女優のコン・リー(Cong Li)、パトロン役は役所広司、相撲観戦シーンでは力士として舞の海が登場する。

私が一番魅かれたのは、サユリの子供時代であるチヨを演じた子役の大後寿々花(おおご・すずか)である。彼女は映画の3分の1ほどを占める子供時代の主役を英語で見事に演じている。貧しい漁村から都の置家に売られたチヨの姿は、「千と千尋」で異界の湯屋に放り込まれた千尋を思いださせる。桃井が演じる置屋の女将はまるで湯婆婆のようだ。しかしファンタジー映画ではないから、「千と千尋」のハクのような救済天使役は登場しない。チヨは街の橋のたもとで自分に声をかけ、かき氷を買ってくれた優しい紳士(「会長」、渡辺謙)にいつかまた出会えることを微かな希望にして、過酷な人生に耐える。もしかすると大後寿々花は国際的なスター女優に成長するかもしれない。

#### 【物議続出】

ところがこの映画、試写会公開のすぐ後から物議続出となった。私は12月15日に封切り直前のワシントンでの試写会(チャイナタウンのシネコン劇場)で見た。物議続出という風評だったので、どれほどデフォルメされた日本がまた描かれているのかと思って見たが、出来映えは上々である。2003年のハリウッド映画“The Last Samurai”に比べれば、はるかに真面目な時代考証が感じられる。にもかか

ならず、日本人、アメリカ人双方からこの映画の評価をめぐって物議続出なのは何故だろうか？ まず、ここから考えてみよう<sup>1</sup>。

この映画に不満を述べる意見は、私が見聞する限り、概ね以下の3つに分類できる。

- 1、「それでもやはりおかしい。本当の日本の姿になっていない。」
- 2、「映画の会話が全部英語で出来ていることに違和感を感じる。やはり日本を描くなら日本語で、字幕を英語にすべきだ。」
- 3、「ヒロインのサユリ役が有名中国人女優では、やはり日本のイメージに合わない。」

1の「それでもやはりおかしい。本当の日本になっていない」という不満は、舞台として想定された京都の花柳界、芸者、着物に詳しい日本人、並びに専門的に日本に詳しい少数のアメリカ人のあいだから出ている。「舞妓の踊りおかしい」「着物、着付けがおかしい」「京都の街が本物と違う」などなどである。特に京都人は文化的なこだわりが強いから、そう言いたいのは判らないでもない。しかし「本物と違う」ことを指摘するならば、本物通りの映画など存在しない。映画はそもそも虚構である。西部劇のガンファイトはみな現実離れしている。黒澤明の「用心棒」で見せる三船敏郎の人斬りも現実離れしている。ドキュメンタリー映画でさえ、編集次第で白を黒にすることも、黒を白にすることもできる。

それでも、私達は映画の「リアリティー」を語る。その時、私達は「リアリティー」という言葉で一体何を意味しているのだろうか。映画がそもそも虚構である以上、単純に現実との事実的照合において「映画のリアリティー」を語っているわけではあるまい。私達の経験している現実との整合性をある程度必要としつつも、虚構としての映画の「リアリティー」の本質は別のところにある。要するに銀幕上の虚構の展開が、その緻密な構成と役者の演技を通じて、映画を見る人間にある共有された情念、情感を喚起する時に、私達は感動と伴にその虚構を「リアルだ」として受け入れるのである。

本物の芸者の踊りを見たければ、お金を払って見ればよい。本物の京都を見たければ、京都に行けばよい。それを映画にする必然性はない。「本物の違う」という過度なこだわりは、映画を楽しむ上で野暮になる。

#### 【全部英語でしゃべる日本ドラマは不自然か？】

2と3の不満、会話が英語であること、ヒロインが中国人女優であることは、関連するポイントである。製作者達がこの映画を英語で作ると決めたことから、日本人と同じ姿で、かつ監督の求める演技ができるならば、役者は日本人、中国人、韓国人を問わないという結論が派生したのである。

従って、会話が英語で出来上がっていることが、どのように不満の原因になるのかを考えてみよう。この不満は日本人よりも日本やアジア文化に対して一定の関心を持つ一部のアメリカ人から主に出ている。しかし、「会話が実際の言葉と違う」という不満はある意味で正当性を欠いたものである。ローマ史やキリスト教史を舞台にした歴史物映画は米国で無数に製作されてきたが、どれも当時の実際の言葉ではない現代英語で出来上がっている。それにもかかわらず、「会話が実際の言葉と違う」という不満をこうした歴史物映画にぶつけるアメリカ人はいない。ところが日本を描いた映画では、会話が英語だと違和感を訴えるというのは奇妙な矛盾だ。ここに問題のカギがある。

---

<sup>1</sup>映画の原作は98年に出版されてヒットとなった Arthur Golden の小説 “Memoirs of a Geisha” であるが、私は読んでいないので、あくまでも映画単体で考えてみよう。原作については、以下のアマゾンのサイトご参照。  
<http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/0739321676/250-9288966-8390651#product-details>

私が知る限り、メルギブソン監督の映画“Passion of the Christ”(2004)はイエス・キリストの人と時代を現代英語ではなく、当時の言葉に近いと言われるアラム語で描いた稀有な例である。観客は勿論アラム語は判らないので、英語の字幕で理解する。このことは映画の雰囲気微妙な変化を生み、複雑なニュアンスをもたらした。私が感じたのは、イエスの生きた時代と現代の文化的、時間的な隔たりの大きさである。ある言語の微妙なニュアンスを別言語で表現するのは、しばしば困難である。それは文化的なバックグラウンドが異なるからである。ましてや二千年の時間的隔たりがもたらす文化的なバックグラウンドの相違は巨大だ。イエスの時代に実際に語られたことを、我々は残された諸聖書から本当に正しく理解しているのだろうか？時間的、文化的な隔たりの故にとんでもなく異なった意味で理解しているのではなかろうか？ そうしたことを痛感したのである。

“The Last Samurai”(2003)も、これを海外で見た私を含む日本人、あるいは日本語に堪能な少数のアメリカ人は、日本語のニュアンスを英語字幕で表現できないことを思い知らされた。例えば、反乱武士の頭領役の渡辺謙が、命を賭けた決意を語る場面で「男子の本懐である」と言う。これを字幕の英語は“*It is my duty*”と訳していたと記憶している。これでは本来のニュアンスがすっかり抜け落ちてしまっている。自己の滅亡を結果する悲劇的な運命でも、それを受け入れて戦う姿に日本人が抱く悲壮感・「美学」を表現する適切な語彙を現代米語は持ち合わせていないのだ。翻訳困難な言葉のニュアンスとは、正にその言語に固有な文化的要素そのものである。

これでお判り頂けたら。要するに、映画“Memories of a Geisha”は、英語で出来上がっているが故に、アメリカ人に大変判りやすいものになっているが、同時に翻訳困難な様々な日本的ニュアンスが抜け落ちてしまっているのではないか？これが「言葉が違う」という不満の根底にある。勿論、こうした不満を抱くのは、日本やアジアなど非欧米的な文化に一定以上の関心を抱き、たとえ日本語はしゃべれなくても、文化的なニュアンスを翻訳することがいかに難しく、同時にそこに文化の固有性を理解する手掛りがあることを知っている知的なアメリカ人のみである。

一方で、アメリカ人がキリスト教史やローマ帝国史を舞台にしたアメリカ映画が現代英語で出来上がっていても、違和感を感じないのは、それは「自分達が馴染み、知っている(と思っている)文化世界」を描いたものだからである。その意味で、メルギブソンが“*The Passion*”をあえてアラム語で製作したことは、意味深長である。ギブソンの意図は知らない。もしかしたら、単に映画を「よりリアルに」と考えただけかもしれない。しかし、イエスの時代と現代の間にある二千年の時と空間の隔たりが、容易に理解できない文化的な隔たりを生み出していることへの結果的な警告となっていると気がついたアメリカ人が、果たしてどれほどいるだろうか？

#### 【エキゾチックであることの魅力:判らないから魅かれる】

ともあれ、映画を日本語で構成し、英語字幕で作れば、アメリカ人には理解し難くなる。ところが、「なかなか本当の意味が判らない」という要素は、実は映画の人気を上げる重要なものでもあるのだ。面白いことに人間は、容易には意味が判らないものにエキゾチックな魅力や神秘性を感じて、強く魅かれる。この映画が英語で出来ている故に、アメリカ人には判り易い分、判り難さから生まれるエキゾチックな魅力が半減しているというのが、この種の不満の原因になっていると思われる。

映画映像における最高度の緻密性と、ぎりぎりまでストーリーの説明性を省いた構成で、謎を提示し、空前の傑作となった例は“*Space Odyssey 2001 (2001年宇宙の旅)*”(1968)である。当時小学校6年生の私はこれをロードショーで見たが、ストーリーは皆目理解できないままに、美しく神秘的な映像

の虜になってしまった。監督スタンリー・キューブリックとSF作家アサーCクラークが製作したこの映画だけを見て、そのストーリーを適切に解説できた論者は当時ひとりもいなかった。皆が「わからない。全く謎だ」と言いながら、この不思議な映画に魅せられてしまったのだ。映画とは別にクラークが発表した小説「2001年宇宙の旅」で、初めてストーリーの種明かしが行われた。

### 【映画“The Last Samurai”との比較】

さて、次に映画“The Last Samurai”（2003）との比較で考えてみよう。“Samurai”を見た日本人は（高校生時代に歴史の授業中に眠っていなかった人達だけであるが）、私を含めて歴史的事実のデフォルメに驚かされた。主要なポイントのみ上げると以下の4点である。

- ①明治初頭の反乱武士が16世紀の戦国武者の甲冑で武装している。
- ②江戸時代以降の武士は典型的な都市消費者階級だったのに、映画では農村で農耕して生計をたてながら、武術の鍛錬に励む姿で描かれている。
- ③反乱武士の村を襲撃する刺客集団がまるで「忍者部隊」である。
- ④欧米との不平等通商条約を締結したのは井伊大老、江戸幕府政権であり、その不平等条項を修正させるのに積年の苦勞をしたのは明治政府であった。しかし、映画では明治新政府の権力者が不平等条約を締結しようと企てたことになっている。

こうした歴史の著しいデフォルメにもかかわらず、一般アメリカ人は当然日本の近代史など知らないの、抵抗感なくこの映画を受け入れた。日本史を多少知っている知日派のアメリカ人に、史実のデフォルメについて語っても、「まあ、ハリウッド映画だからね、そんなもんだよ」という反応で、“Geisha”ほどの物議は起こらなかった。デフォルメの度合いが“Geisha”よりはるかに大きい“Samurai”の方が、物議をよばずに受け入れられたことは興味深い。その理由は、ひとつには既に述べた使用言語の違いであり、他ひとつは“Geisha”がより真面目に日本を描こうとした映画であると評価されていることの結果でもあろう。

### 【空想ジャパニーズ・レストラン、“Samurai”と“Geisha”】

2つの映画を、ジャパニーズ・レストランにたとえて考えてみよう。日本人の私がアメリカ人の友人ビルさん（仮想）と一緒に、2つのジャパニーズ・レストランに入ったと想像して頂きたい。

レストラン“Samurai”に入ると、広い玄関には武者鎧が飾られていて、「へい、らっしゃい〜！」と声がかかる。店のオーナーはアメリカ人であるが、女中さんも料理人もみな日本人で、日本語をしゃべっており、「天婦羅、いっちょう上がり〜！」とか声が飛んでいる。畳と掘りごたつでできた座敷に上がると、ビルさんは畳や座布団、床の間、掛け軸が珍しいらしく、しきりにキョロキョロしている。「お品書き」を見ると全部日本語で書いてあり、英語訳が多少添えられている。「鍋焼きうどん」の英語訳は“Hot soup noodle in a small pan”、「茶碗蒸し」は“Hot egg pudding with vegetables, chicken and shrimp”である。ビルさんは「茶碗蒸し」が一体どういうものかほとんど想像できないが、面白そうなので注文する。出て来た茶碗蒸しを一口食べて、私は仰天した。なんと甘い！味付けに砂糖を入れているのだろう。ビルさんは“Good!”とか言って甘い茶碗蒸しをパクパク食べている。次に「稲荷ずし」を頼んだら、皿にわさびを添えられて出てきた。女中さんに「稲荷ずしにワサビはいらないでしょ」と言うと、「は〜、すいません。でも以前アメリカ人のお客さんに『すしなのになんでワサビがついてこないんだ？』と言われたもんですから」と釈明する。店を出てからビルさんに「この店の日本料理はずいぶんデフォルメされている」とこぼすと、彼は「まあ、オーナーがアメリカ人で、お客もアメリカ人が多いから、そうなるんじゃない」とあまり意に介していない様子ある。

次はビルさんと一緒にジャパニーズ・レストラン“Geisha”に入った。店に入ると、玄関に美しい着物が飾ってある。従業員はみな流暢な英語で会話し、シェフは“**One tempura ready!**”と声を飛ばしている。座敷はない。テーブルにつくと着物を着た美人の女将が出てきて、流暢な英語で挨拶された。良く見ると目が青いので、「日本の方ですか？」と尋ねると、実は中国人だと言う。店の従業員の半分は中国系や韓国系だ。メニューは全部英語で書かれ、判りやすいように小さな写真が添えられている。ビルさんは茶碗蒸しが気に入ったらしくて、またそれを注文。出てきた茶碗蒸しを食べて、「あれ、あまくないね？」と首をかしげる。私は、これが本来の茶碗蒸しですよと説明する。味噌汁のお椀にレンゲが添えられて出てきたり、多少の違和感はあるが、料理は合格点で私は満足した。ところが、ビルさんは釈然としないようで、こう言った。「“Geisha”はジャパニーズ・レストランとしてはちょっと物足りないね。」 さて、あなたならアメリカ人の友人をどちらのレストランに連れて行きますか？ Samurai ですか、それとも Geisha でしょうか？



日本版公式サイト

以上